つながれ　ひろがれ　ちいきの輪

in　TOKYO

実践報告会

麦久保園　事例報告

「＃あきる野エール飯へエール」

「市内都立高校和太鼓部演奏会」

令和3年6月25日　　麦久保園　施設長　窪島裕也

令和元年度までの取り組み

他法人特養と共同で町内会館にてカフェ（Ori　Café）を実施。

【概要】

・移動図書館⇒市内中央図書館よりイベント内容や参加者層を加味し100冊程度源泉。

・本格出張喫茶店⇒市内の老舗喫茶店のマスター協力のもと挽き立てコーヒーと焼き菓子で談笑。

・出前講座（イベント）⇒笑いヨガ・演奏会・映画・大人紙芝居やリハビリ体操・感染症対策講座　等。

年間5回、各回2時間程度で実施。各回2施設で出前講座については持ち回りで企画。

令和2年　新型コロナウイルス流行

Ori　Café　の取り組みは2年間継続して企画し、担当職員が開催周知のチラシを町内全世帯にポスティングすることで、地域の方と顔の見える関係性を少しずつ構築。2年目には地域高齢者より「次はいつあるの？次はどんなことやるの？」と声を掛けて頂ける機会も増えてきた。

2020年2月　新型コロナウイルスの猛威が・・

感染への不安、3密問題などで今までの取り組みにブレーキがかかる。

令和2年度　地域活動の模索

新型コロナウイルス感染症への不安や感染対策の中、日々の業務で精一杯の日々、
現場職員の疲弊が増していく。
地域もまた営業自粛や集いの場の閉鎖など閉塞感が募る。

「社会福祉法人として様々な側面で苦しい実情が生じている中で何か前向きな取り組みができないか・・・」休憩時間に交わした会話より「身の丈に合った取り組みを企画してみよう」の発想へ　（5月のあるひとコマ）。
この時期は対面で何かをすること、人が集まる取り組みに社会的にも取り組めない。
それであれば、極力対面しないで取り組める企画はないか？

事例１
＃あきる野エール飯へエール企画

あきる野市民・檜原村民 8万2,000人のテイクアウトプロジェクト

＃あきる野エール飯（めし）

AKIRUNO TAKEOUT PROJECT

“美味い”はコロナに負けない。

麦久保園　地域エール企画

～あきる野エール飯へエール～

新型コロナウイルスの影響により、日頃より麦久保園の中で新型コロナウイルスが発生しないよう、
細心の注意を払い業務に励んで頂けていること、心より感謝いたします。
一方、新型コロナウイルスの影響は、地域においても多くの課題を生んでいます。
特に、地域における個人商店は先の見通しが立たず、明日の生活もままならない状況が発生しています。
私たちは、特別養護老人ホームという施設を運営する傍ら、社会福祉法人という会社です。
社会福祉法人という会社は、地域で抱える課題に貢献することが責務とされています。
そこで、この度、あきる野市が企画している「あきる野エール飯」を支援させて頂きます。
また、麦久保園でコロナウイルスが発生した際、地域から食事の協力も得られるような繋がりを作る目的もあります。
具体的内容は下記の通りとなります。

地域エール企画の内容

① 6月の毎週木曜日をエールデイとします。
（6/4、6/11、6/18、6/25　計４回）

② エールデイは、出勤職員全員分の昼食を「あきる野エール飯」参加加盟店のお弁当から提供します。
（※職員の実費はありません。）

③ SNS 等を活用している人は有記の方法でお弁当のＰＲをしてください。（エールを送る目的でお願いします！）

＃あきる野エール飯 の投稿方法

料理人

購入者

地域の飲食店が苦しい実情にある。

地域の飲食店から職員の昼食（弁当）を注文してはどうか？との発想をもとに以下の下準備を進め、実施へとつながる。

１）あきる野市商工会議所へも取り組みを共有させて頂き、
　　ポスターも掲示。

２）市内エール飯参画の飲食店を調べ、事前に訪問しながら企画案を提示。

３）6月の毎週木曜日をエールデイと称し、その日は出勤職員全員分の昼食
　　をテイクアウト（計4日間、6か所の飲食店より毎回20～40食を注文）。

４）職員へ弁当の感想やエールメッセージ等をSNSを活用しPRの協力を依頼。

事例２
市内都立高校和太鼓部の演奏場所の提供

【企画の背景】
令和元年度、秋に実施した麦久保園音楽祭への出演依頼を切っ掛けに交流がスタート。
第1波による1回目の緊急事態宣言が明けたころ、顧問の先生より1本の電話が・・
学生たちの演奏の機会が軒並み中止となり、学生たちのモチベーションが下がっている。何かお年寄りの皆さんへ演奏を披露させて頂くことは難しいか？との問い合わせが入る。

施設ご利用者も社会参加の機会、社会との交流の機会が失われていたので是非企画したい。
一方で、緊急事態宣言が明けたと言え一定の人数が集まる活動への不安もある。

実施するための感染対策を整理

★3密の回避

・密閉　：　屋外（園庭を演奏場所にする）。

・密集　：　演奏団体、ご利用者、職員と学生の一部のご家族のみとし、
見学場所をエリア分けすることで、集団を分散。

・密接　：　ご利用者は見学場所を食堂ホール内、ベランダに限定し
学生やその関係者との接触、飛沫を回避。

★実施に向けた判断材料

・市内の感染状況、陽性判定者の人数など統計的根拠とする。

（市内感染者速報　：　9/1　29名　、10/1　36名　、11/1　38名）

・施設としてもこの時期は面会を条件付きで実施していた。

・地域の基幹病院の入院病床の逼迫なし。

国内では　GO　to　○○　による人流が当たり前の光景に・・・

↓

年末年始に向け感染者増加（リバウンド）が危惧される中で、タイミング的にはこの瞬間しか可能性が作れない。

↓

町内会会長へも企画案を説明し、今回は施設内を対象とした限定的なイベントであることや演奏時間中の「音」についてご理解を得る。町内会各世帯へは回覧板を使用し、企画説明を行う。

↓

地域への説明、職員間で方向性の共有を経て

実施判断に至る

当日の様子

今後の活動について

人が人生を歩む上では「安心・安全」の確約はない中で、活動に伴うリスクに一定のご理解を得られる判断を心がけながら・・・

・Ori　Caféの再開に向けた実施内容やタイミングを探索中。

集いの場が限定的になっている中で、引きこもりがちになっている現状もあると聞にしていた。人と人との長時間の接触を避けながら、地域の高齢者（特に介護サービスを利用していない方）が外に出る目的を創り出せるか、それが地域の高齢者にとって必要な機会なのか、地域に拠点を置く2法人で少しずつ話を進めています。

まとめ

・地域貢献活動や社会貢献活動を行うにあたり、私達は「継続性」と「繋がり」をキーワードと捉え活動をしていた。しかし、身近な職員の提案やメディアを通じたコロナ禍での課題を頼りにすることで、従来よりも実施に向けた準備時間やマンパワーを最小限にし、大きな負担を感じることなく実施することができた。

・今回の活動を通じ、改めて社会福祉法人としての使命感を背負いすぎ、「継続性」や「繋がり」を求めすぎ、私達自身の発想を制限していたかもしれないと痛感した。

・コロナ禍において、職員の提案などから始まった今回の活動は社会福祉本来の思想に近く、本日ご参加されている各法人、施設の皆様にとって少しでも活動のヒントに寄与できれば幸いです。

ご清聴ありがとうございました